



最寄り駅にあったスーパーが改装されて、店内に古本屋ができた。

といっても、絶版になっている古本とか価値ある古い本が置かれているようなところではなくて、
読まなくなった本を買い取って綺麗にして再び売る、というようなブックオフのようなスタイル。

私はもっぱら文庫本が好きなのだけど、
古本の文庫本はカバーの背の部分がよれていたたりする。
ちょっとだけ破けていたり、ページが折れていたたり。
なかにはうっすらと線が引いてある部分もあったりする。

マニアックなのかもしれないけど、それが結構好き。

あー、この本は誰かに読まれていたことが確かにあったんだ。

ぞんざいに扱われていたときもあったのね。
それとも大事に繰り返し読まれていたのかな。
いずれにしても、時を経てこうして出会ったんだね。
なーんて思ってしまう。

つまりは、本にも出会いはある。

この前私が直感で選んで購入した古本にはレシートが挟まっていた。

ずっと挟まっていたせいか紫色のインクの印刷もだいぶ色あせて、
全体的に薄まっていてつるつるしていた。

日付は、2003年。

この本の栞替わりにレシートを使ったのかもしれない。

レシートには高島屋で化粧品を買ったという記録が残っていた。

今から10年近く前に高島屋で化粧品を買う恋愛がへたっぴそうな大人のお姉さんをイメージしてたら、
なんだか無性にドキドキした。

なんで恋愛がへたっぴそうかって？

タイトルがね、

「恋愛中毒」だったから。

がむしゃらに恋をするには危険がはらむし体力も消耗する。
でも、本気の恋は「危険」だとか「体力」なんていうワードを鮮やかに忘れてしまうくらい、
盲目なものだ。

この本を、今では30代後半くらいになっているレシートの人も10年前に読んだんだなぁと想像してみた。

今は結婚しているかもしれない。

もしかしたら子どももいるかも。

主婦業をきちんとやっていて、すっかり恋愛から遠のいている彼女が、

いつか

失恋した日に高島屋で化粧品を買いこんで、
泣きながら寄った書店で『恋愛中毒』を買ったこと。

なんとなく思い出して

「あのときは散々泣いたけど、今幸せだよ」

そんなふうに思っていたら、なんかいいよなぁと思うのです。